

哲学の手稿とアーカイヴから学ぶ¹

ベネデッタ・ザッカレロ

村瀬鋼 訳

手稿は、数世紀にわたってとはいわずとも数十年にわたって、専門家オンリーのための遺物として扱われてきていたのだが、ようやくごく最近になって、いっそうアクセス可能なアイテムになってきた。にもかかわらず、いまだなお、作者の著作の批判版に取り組み研究者や、関連のコレクションを担当するアーキヴィスト〔文書係、アーカイヴ管理者〕だけが、作者の手稿やアーカイヴ資料についての専門知識を展開しているという状況にある。自筆原稿を読み取るのには時間がかかり、現代の研究や知的生産一般に課されるペースにはなかなか見合わない。手稿を研究するアーキヴィスト、編集者、学者たちは、こうした書類から伝わってくる情報の複雑さを、各作者のアーカイヴの還元不可能な個性として認識している。

哲学手稿はそれ以上によく知られていない対象である。こういった謎めいた文書と取り組もうと思うだけの気骨がある場合、ひとが潜り抜けるべきいくつかの「イニシエーション」は、文学的文書を扱う仲間たちが経験するのと似たものである。最初のイニシエーションは、当然、誰かの手書きと懇意になるということにある。だがこれは始まりにすぎない。続くステップはいくつものチャレンジングな作業を含む。構成の戦略や、ノートやら引用やらの自分用の保存のテクニックや、頻出する略号や、草稿や欄外の書き込み時に使われている符号や、講演や講義のためにスケッチするときの総合の方法や…といったものに馴れ親しんでいく必要があるのだ。そういった資料は、印刷されたページと比較して質的な情報の層が豊かである（手書きの見た目、紙の種類や品質、テキストを補うために用いられているシンボルや絵、こうした一切が、方法論的に分析可能ではあるもののしばしばそれ以上に直観的に把握されるコンテンツを担っている）というだけでなく、分析と解釈における異なったスキルと異なった方法論を要求するのである。

一人の作者の手稿とは、研鑽を積み、言葉を紡ぎ、思考を提供する生きたプロセスのうちで生き残った分の痕跡であるわけだから、こうした「コーパス群〔corpora = 身体たち〕」の複合体を、時を経て各部分間相互と同時に全体に対して器官として働く特化された諸部分からなる一つの有機体に比すことは、おかしなことではないと思われる。一つのプロジェクトの進化的変容における諸々の集まりや流れに含まれる相関的なトロジーの数々、手稿の諸々のセットに見いだされるシンメトリーや類縁性、分類を再検

1 【訳注】本稿は、2024年7月15日に行われたザッカレロ氏の講演の原稿の、後日提供された修正稿の翻訳である。修正稿は講演当日の原稿とほぼ同一のものであるが、講演の時点で進行中のものとして紹介されているプロジェクト（AITIA）が講演後の2024年末に終了したため、これに関する部分の記述が過去形に修正されている。またタイトルは、講演時には「哲学の手稿とアーカイヴから何を学ぶのか（What can we learn from philosophical manuscripts and archives?）」というものであった。

討した後の一つのコーパスの諸部分の再配置によって現れてくる意味の変化、筆記用具の研究を通じて現れてくる読解や作文の奇妙なロジック、下線を引かれたり消されたりしている言葉によって示された公刊における批評の戦略など…。一人の作者の手稿に長い間じかに身を曝した後では、これらすべての現象が読者には亡霊のように現れてくる。これらの現象は時を経た層状化の結果なのであって、知覚されるには懇意な関係が要求される。

アーカイヴの長期にわたる熟練知の形式において蒸留されてくる、哲学的手稿のこうした「美学的・感性的」認識について、読者が気づくようになるのは、しばしば、異なった作者の研究にあえて移ろうとするときになってのことであったりする。新大陸へのこうした上陸は、外国旅行に似ている感じがする。つまり、しばしば異なった言語、発見して描き直さねばならない新しい地図、まだよく知らない慣習や、周囲の雰囲気の中で感じられる変化。新しいコーパスを調査すると、最初の作者の諸文書を旅して回るために以前多少とも意識的に構築された方法論が、事後的に明らかになることがよくある。書き方は作者の個性を示しているので、新しいワンセットのコレクションという形をとった新しい調査領域にアプローチする研究者は、以前自分が経験的にこしらえた諸々の方法を新しい研究対象の要求に合わせてフィットさせなければならなくなるため、却ってそれらの方法の特種性に気づくようになるのである。

哲学手稿を通して何らかの概念的布置の生成を跡づけようとするとき、問題はさらにずっとデリケートなものになる。第一に、先に触れたようなきわめて経験的なレベルにおいて、文献学の訓練を受けているわけではない研究者たちが手稿を参照するのは主に学術的編集や高度に専門的な解釈のためだ、ということがある。これはつまり、哲学の専門家が一つ以上のアーカイヴについてスキルや経験を獲得するのはいっそう稀だ、ということの意味する。このような主観的な障碍を除いたとしても、哲学手稿の研究および編集のための特種なアプローチと共有可能な方法論との構築方法について、対象の持ついくつかの特徴が、それ自体、障碍として立ち上がってくる。

あらゆる文書は、(通常は前言語的なものとして自己表象されていた) 或る内的経験を言葉に翻訳しようとする試み、思考を言語の鋳型に合わせようとする試みである。にもかかわらず、概念的な文書というものはたんに自分自身との闘いであるだけではない。というのも作者はしばしば、異なった様々な思弁的伝統や定説的理論の間に橋を架けるために格闘するからである。哲学者たちは、自分のテキストを練るにあたって、自分が直面する文化的・理論的遺産のイメージを、その遺産を受諾するにせよ論駁するにせよ、恒常的に産み出した創り直す。そうである限り、哲学と呼ばれるものは、たんに生きた経験に根差し実存的視点に立脚した創造的な思考行為であるだけでなく、自分自身の文化とのしばしば明白な対話を含むテキスト上の生産行為なのである。さらにその対話は、認識論的な諸々のパラダイムや特種的な諸々の目的をめぐって構造化されており、有効性の決まった基準や、こういった認識論的野心によく合致すると想定される手続きや形式や文体などとも関わりを持っている。普遍性を標榜するにもかかわらず、哲学的言明は、個人的な表現と共有された語彙との間の妥協の結果なのである。哲学というディシプリンそれ自体は、伝統的には、文学の場合のように作者自身の表現の仕方では

なく、むしろ査定された理論的内容にこそ焦点を置いているので、まさしく表現の厚い媒介が——例えば、哲学的文書に暗黙裏に含まれた一群の文学的力学のまるごと全体が——容易に忘れ去られてしまうのである。

実のところ、哲学手稿の研究および編集は、これに関して、テキストそれ自身の限界をはるかに超過する広汎な情報群を提供してくれる。アーカイヴは研究者に、印刷された書物の提供する静態的な表象を超えて、諸概念の出現を研究すること、抽象的語彙の産出を跡づけることを可能にする。これによって、抽象的な思考がいかにして多層的な言語の織物を相手取った作業に淵源しているかがあらわになってくるのだ。

このかぎりにおいて、手稿とアーカイヴは、例えば、諸概念の定式化に着想を与えた諸源泉の異種混交的な広がりを見せさせてくれる。アーカイヴの研究はまた、各思想家が、いかにして自分自身のために諸々の参照の折衷的な風景を、単一の言語や国家的伝統にはおよそ属さないような概念的ネットワークの銀河を創り出したかを、われわれに観察させてくれる。われわれは、理論とは普遍的なものだと考えがちではあるものの、個人のライブラリーや手稿がわれわれに示してくれるのは、抽象作業もまた諸々の言語やコードの問題なのだということなのであって、そのとき、思想家／作家の仕事は、こういった諸々のコードの間の文化的媒介者として見えてくるのである。このことは、概念の産出の分析のための或る別のパラダイムを示唆している。それは、中立性と普遍性の価値よりも、統合と総合の価値にフォーカスするパラダイムである。

アーカイヴの研究を通じて、ひとは、理論的思考の進化というものを、じかに経験された具体的冒険として、学問の歴史というものを、ダイナミックで集団的なプロセスとして、捉えられるようになる。フランスの哲学者ピエール・マシュレは、比較的最近の本のなかで、「国民哲学」という考え方を批判し、哲学史理解におけるその発見的価値に異議を唱えた²。彼が示すところでは、理論とは、ヘーゲルをフランスに「輸入」したヴィクトル・クザンや、ジュール・バルニを中継役としたカント受容などに例示されるような、度重なる「ハイブリッド化」として眺められるべきものである。一つの土地、一つの民、一つの言語というロマン主義的理念に根差した「国民性」の概念は、ポストモダン、クレオール化、グローバリゼーションといったカテゴリーと引き比べると、ますます時代遅れのものに見えてくる。これに関して、思想家たちの仕事は、彼らの手稿とアーカイヴのレンズを通して見ると、文化的媒介の様々なモデルをわれわれに提供してくれている。すなわち、アーカイヴ研究は、理論の言語が様々なコードや伝統の間での概念的折衷主義だということを明らかにしてくれるものであり、文書の言語的素材のなかに沈殿した異質的な諸々の世界的〔＝非-国民的〕諸概念の開示と再構成とに寄与するのである。

哲学手稿は、哲学研究においてほとんど用いられてこなかったが（哲学史の執筆においても、公刊テキストの解釈においても）、テキストを書くことに関係した水面下の諸々のプラクティスをあらわにするのを助けることで、哲学についての或る異なった理解を

² P. Macherey, *Études de philosophie française. De Sieyès à Barni*, Paris, Publications de la Sorbonne, 2013

展開するのに実に役立ってくれる。プラクティスと言うのは、つまり、テキストの多数の層や多様なヴァージョン、一定の理論的諸問題との格闘の連続性、仲間たちや学生たちとの遣り取り、かくも数多い普遍的な言明の背後に横たわっている躊躇いや懷疑や不確実性、われわれが抽象的言説とは必ずしも結びつけようとはしない状況や旅や会議等々によって演じさせられた役割、などである。1970年代以来、生成批評は、作者の手稿研究に特化した重要な道具立てと文献学的方法論とを発展させてきたが、哲学的ないし理論的アーカイヴを扱う際のガイドラインを練り上げることについてはほとんど何もなされてこなかった。

理論的な手稿は、やっとうごく最近になって適切な注目を受けはじめた奇妙な対象である。例えばフランスでは、2012年に、ミシェル・フーコーの重要な手稿一式が国宝に指定されて、フランス国立図書館に高額で買い上げられたために全国的な新聞沙汰にまでなった。その10年足らず前の2004年、デリダが自分のアーカイヴをIMECに残したときには、たいして注意を払われなかった。また、ヨーロッパでは哲学手稿を蔵する数々のアーカイヴ・センターが創られたことが重要資料の収集と保存を可能にしてきたことも、注目に値する。これらのセンターが、抽象的文書や概念的思考の記憶が生き延びることを可能にし、これらの資料が生き残ることを可能にしたのである。さらに、デジタル・ヒューマニティーズの近年の発展もこれには貢献している。こうしたドキュメントは、ますますアクセス可能になり、相応の注目を得つつある。

しかしながら、研究者やアーキヴィストが、原稿一式を編集・刊行・解釈するためにアド・ホックなツールを考え出すことによって表現される創造性は、まだ共通の方法論的基準に達していない。例えば、詩の草稿は小説のスケッチとはその内的論理において異なっており、したがってまた要求される解釈の戦略においても異なっているわけだが、それと同様に、哲学の文書とその資料的な痕跡も、或る特種な理解を必要とする。さらに、文学的文書については、生成批評はすでに、手稿へのどんな「目的論的アプローチ」にも潜んでいる魅惑とバイアスを強調しながら、その存在論における転換を打ち出している。すなわち、草稿は、来るべき作品の準備の純粋な痕跡としてよりも、それ自体として解釈可能なドキュメントとしてアプローチされるべきなのだ。この観点では、文学の「エルゴン」とみなされるべきは、最終的な産物ではなくて、プロセスなのである。こうした方法論的な前進のおかげで、刊行されたプロジェクトに（さらには未刊行のプロジェクトにすら）関係づけられない資料におのずと相応の注意が払われるようになり、新しい種類の死後公開のテキストの編集が進むことになった。では、哲学的文書についてはどうか。近年のデジタル版の発展と相俟って、こういった観点は、未公開の哲学手稿についてもインパクトを持ってきたように思われる。その一例は、講義や授業のためのノートの新刊行かもしれない。それはこの20年ほどの間に、ほとんど一つの「文学的ジャンル」にさえなっている、しかし、こうした資料へのこのような革新的な感受性は、哲学の仕事とは、哲学のエルゴンとは何であるのかについて、われわれに何を教えてくれるのだろうか。

思想家の手稿の観点から見れば、哲学は、出版された一連の作品というよりも、再定式化の継続的のプロセスに沿った抽象的な語彙の産出の問題であるように思われる。こ

のような観点からすると、アーカイヴを通じた哲学文書の研究は、文学的な手稿の分析とも、印刷された書物や思想史を根拠とする諸理論の研究とも、異なる研究分野であるように思われる。

手書きのページを前にすると、哲学や抽象的思考の媒体である言語が、消された文字や空白という形で肌で感じられるようになる。これらの記号が何よりもよく物語っているように、言語の限界と構造に関する丹念な作業なくして、概念的な創造はありえない。さらに、躊躇い、書き直し、消された箇所や訂正は、哲学の仕事が、言語表現の名状しがたい境界線との折衝であるだけでなく、仲間や学生や情報源との間で共有される語彙との、絶え間ない対話でもあることを示している。哲学は、その媒体についてのこのような観点からは、自分と自分の文化的地平との連続的な対話として現れる。自己検閲や端的な検閲の力学は、作者とその文化的環境との間の相互作用を極めて直観的に現出させる。アーカイヴは、忘れ去られた書物たちとの暗黙的になりすぎた諸々の争論の劇場である。最も内面的で抽象的であるように見えるもの——思想家が孤独に閃きと観念の遊戯に興じる個室——の中核には、意識を伴った時代と歴史とにおける相互作用の最も明白な痕跡が刻まれている。

手稿は、多次元的な空間に置かれた多次元的な対象である。一つのコーパスとしてのその存在は、資料のネットワークという形を持っており、このネットワークは、可能な分類、基準、支持体、表象に従って、潜在的に無限の方法でブラウズすることができる。手稿とアーカイヴの立場からすれば、理論という言葉の媒体は、書物を読むことの線状性に比してより高度な複雑性を持った装置の一部なのであり、この装置においては、これらの多次元的な対象はテキストの担い手であると同時に生身の資料でもあって、情報は多方向的な通路を横断して展開する。読者の立場からは、テキストの概念的な理解のほかに、思考を言葉にする際のこのような多層的な提示の複雑さを把握する能力が求められる。

アーカイヴに照らして哲学のエルゴンを問う際に私が言及したい第三の要素は、印刷された書物のそれとは異なる、手稿が私たちに直面させる奇妙な動的な存在論である。哲学アーカイヴという土俵で仕事をするを選んだ研究者は、一作者の仕事の持つ生涯と物語における連続性に敏感である可能性が高い。手稿によって立証される何かを表現するさまざまな試みを横断して、いわば進化の線のようなものが現れるように思われる。そのような行為は、線状でない経路をたどって未完の試みに迷い込んだり、未解決のジレンマをめぐって回転して口頭発表されたテキストに再浮上したりするかもしれない。草稿、読書ノート、図表、スケッチなどは一つの連続体であり、私たちはこの連続体を通して哲学的問題へのアプローチの特種性を知り、この連続体によってこの特種性を表象するよう誘われるのである。それらのものは、思想家や作家が、日々、伝統が提供する答えとも向き合いつつ自分自身の問いと向き合っているということ、まざまざと見せてくれる。このような観点からすると、理論の生産は、対象ベースというよりもむしろ「流れ」ベースであるように見え、哲学的な場面の幕の背後にあるものを観察することで、このような学問の実演的な特徴が明らかになる。言い換えれば、哲学は、一つの実地訓練、一つの恒常的な問いかけであり、特種的かつ具体的な文脈に関連した一つの

対話的实践であるのだ。書簡や未公刊の言説や教材を研究することで、哲学の歴史が分かち合うことの様式にいつそう根ざしたものであったことが明らかになる。欄外の書き込みは、読者としての作者の肖像をわれわれに与えてくれる。講義やセミナーのために取られたノートは、多くの時間、教えることで生計を立て、多くの時間、仲間や学生との相互作用によって自らの言説を育ててきた職業哲学者に、生命を与える。

生成批評はたしかに、主要諸著作の複雑な生成からただ一つの稿本の詳細な分析に至るまで、手稿についての様々な観察スケールに対応するさまざまな論理を探索してきた。この点で、哲学アーカイヴについての研究は、異なった諸々の解釈学的振幅を持った探求として理解することができる。例えば、後期モーリス・メルロ＝ポンティが、理論的にコード化された言語を使う代わりに、文学からすべてのキー・コンセプトを借用する際によく確かめられるように、たった一つの語の選択でさえ、すでに哲学それ自体についての一つの展望を開示しうる。それは殻に閉じこもった西洋哲学の批判なのである。反対に、われわれは、単一のコーパスを扱うのではなく、哲学者たちのネットワーク全体を扱う研究を想像してみることもできるだろう。

だがそれは集団的な仕事の目的である。

前述のように、哲学手稿の研究は、高度に専門化された研究者、チーム、機関によって、世界中に分散した場所と環境で行われている。手稿の研究は、獲物の特異性に合わせてテクニクを見つけ、使い分けるといふ点では、狩猟に似ている。欠点は、このように能力が分散しているために、資料の分析と編集において共通の方法論を確立することがいつそう難しくなっていることである。

このような目的のために、私はヨーロッパ4カ国とインドの理論的手稿の研究・保存を専門とする9つの機関を連合させた5年間の研究プログラムを構想し、開始した。CNRS（フランス国立科学研究センター）の人文・社会科学研究所が資金を提供し、このネットワークは2020年に発足し、2024年末まで機能した。

このネットワークは、私がコーディネーターを務める現代テキスト草稿研究所（ITEM、フランス国立科学研究センター／パリ高等師範学校）が運営しており、哲学手稿に関するものでは、以下のようなものがある：

ベルゲン大学ヴィトゲンシュタイン・アーカイヴ（ノルウェー）、ルーヴェン大学フッサール文庫（ベルギー）、ヤン・パトチカ・アーカイヴ・プラハ（チェコ）、そして現代出版資料研究所（フランス）。

また、インドの3つの機関も含まれている：

シュリー・オーロピンド・アシュラム・アーカイヴス・ボンディシェリー、フランス・ボンディシェリー研究所、ジャダヴプル大学コルカタ校の文化テキスト・記録学部。

国際研究ネットワーク「国際的理論のアーカイヴ、間文化的アプローチ」（AITIA）プロジェクトは、手稿やアーカイヴの調査を通して、様々な伝統や学問分野にまたがる主体間・異文化間のダイナミクスを強調し、これらの知的プロセスをダイナミックに表現するデジタルツールを描くことで、読者が文書にアクセスできるだけでなく、それらの間に存在するストーリー、リンク、関係を視覚化できるようにすることを目的とした。

ここ数十年、各国の経済における相互依存の高まりとともに、学者たちは、国の文化を形成するうえでこの制度的装置が果たす役割について考察してきた。さらに最近では、デジタル化の進展により、各国のアーカイヴが所蔵する何千ものアーカイヴ・コレクションがグローバルな情報圏に登場するようになった。ますます多くのアーカイヴ画像が、アーカイヴ機関の枠を超え、またかつてはアーカイヴの実践と知識を決定していた国家の枠組みを超えて、世界のどこからでもアクセスできる可能性を持つようになった。

このような脱区画化には多くの利点がある。田舎にある埃っぽい棚からワールド・ワイド・ウェブへの移行は、何百万人もの潜在的な利用者に、自分たちの歴史的・文化的基盤をよりよく理解する手段を提供する。それはまた、超中央集権的でアクセスが困難であることが多い個別の国家機関に分けられて区画化されてしまう以前のアーカイヴ文書が、本質的にトランスナショナルでインターカルチュラルな性格を持っていたことの証でもある。理想的には、デジタルによる可視化によって、いかにして、数多くの地域文化や国の歴史が、その相互接続性や、交流、翻訳、文化移転といった知的ネットワークの媒介を通して形成されてきたかを、観察できるようになるはずである。

しかし、こうした新たな発展には、アーカイヴ文書の解釈やナビゲーションのための適切なツールも必要である。実際、デジタル化はそれ自体として、これらの文書が忘れ去られたり、判読不能になったり、ナビゲーション不能になったり、イデオロギー的流用や知的操作や乱用の対象になったりすることを必ずしも防ぐわけではない。このような事態は、新しいデジタル・アーカイヴの実践に特化した知識と解釈の適切な枠組みを構築することによってのみ回避できる。

私たちは、主要な国の研究機関や大学が、それぞれの文書コレクションを適切で一般にアクセス可能なアーカイヴへと変貌させる時代に生きている。研究者自身が、自らの実践や仕事によって残された痕跡の価値をますます認識するようになり、集団的なプラットフォームを通じて、自らの（デジタル）アーカイヴを構築することさえ奨励されている。

このような状況において、AITIA プロジェクトは、1) アーカイヴ、2) デジタル化、そして3) 広くは、構造化されターゲットが搾られた諸経験に基づいて概念や抽象化を生み出すことを目的とした知的作業として目指される「理論」の産出、というこの三者間に存在する相互作用について考察することを提案した。

このような観点から、私たちは一般的な四つの目的を定義した：

1. 国際的なワークショップを開催し、さまざまな理論分野（哲学、人文科学、政治思想、自然科学）の学者、アーキヴィスト、デジタル・ヒューマニティーズの専門家による国際的なネットワークを構築すること。
2. このような知識を用いて、理論的手稿の研究、解釈、デジタル・エディションに特化した新しい方法論的ツールを開発すること。歴史学者や伝記作家、文学研究者や生成批評の専門家など、特定の分野の研究者たちによってアーカイヴ資料は長い間研究されてきたが、現在利用可能な方法論的ツールや解釈のプロトコルは、哲学や概念的思考に関わる理論的手稿が提起する特有の課題には適応していないかもしれない。
3. このようなコーパスに埋め込まれたストーリーを、文化史とその遺産の理解を深め

る手段として出現させるようなデジタル戦略を開発すること。このような文書のダイナミックで相互運用的な表現により、文化史の断片やサンプルを直観的に表示し、ヴァーチャルな三次元（空間、時間、関係）インターフェイスを形成し、アーカイヴに属する痕跡だけでなく、交換のダイナミクスや、空間／時間的な諸々のフレームとのリンクを利用できるようにする。

4. 私たちは、理論的アーカイヴが本質的にトランスナショナルでトランスカルチュラルな次元にあること、そして有形無形の文化遺産として重要であることを強調したい。理論家や哲学者や科学者による、手稿や書簡や個人的なメモに関するアーカイヴ研究は、概念的な思想や科学的概念の精緻化が、本質的に多言語かつハイブリッドなものであることを明確に示している。

理論における革新は常に、多様な伝統、多様な文化的視野、多様な学派、多様な言語圏などの間の相互受粉という形をとる。このように、アーカイヴの研究は、国家的・個別専門的・共同体主義的な地平に代わる政治的な路線を浮き彫りにし、哲学と理論のアーカイヴは、理論家を、旅行者として、翻訳者として、文化の仲介者として、提示することになる。

今日、私自身がこのような役割を果たしてきたことを願うとともに、これからの数年間、国や哲学諸分野を超えた対話を続けていきたい。